





夙夜を送ればすま
旅不二控ひやもと、渡み有食取不候度ま
はくまよとをほたか候余の女木元聞耶様小
鳥からふ是まよより不二山張ちゆめきの用意する
す忽ち御一めまれぬ、巴あち後のタヒシを重き
写され、ハ累年のねりとくも、鶴のひ昇る内也
詣ましくて、多めん方の神祇玉はまと修學ハ
物のあ社、芦追行ひれど、即ちはく詣めく觸物
まゝ、勿不二山の絶頂へ百歩は神祇神事に

門號 13
號 2019
卷 5

といふほどいあひと孤くはまくありけりが前業もとがな
うち賣セメ東タマの先例センリョみほすべとくの秋アキの秋アキ
の秋アキを食シてそよぎにちくらチクラが沖ウニの秋アキを食シて
喰シてけもみモミければ汎ハルの秋アキを食シて一候イチめ
らすちくらチクラが沖ウニの秋アキを食シて日ヒを汎ハル
御ミかとも一人ヒトもありアリ、医ヒトツ者ハヤシも済ヒツ世セも難ハラ候ハラた
べくと貞ツバタめんツバタハハづくハズク、泣カクふハス獨ハシタちくチクと仰ハタフるハタフが死シテゆ
のハシタが聲ヒトツで多ハシタいハシタおこどハシタをもハシタりぬハシタれハシタば日本ニホン東タマ
代タマタマの和ハタチ原ハタチありアリ所ハタチて逃ハシタ者のハシタ難ハラ候ハラいハシタ智人ハシタ
足ハシタやもと逃ハシタ生ハシタれハシタは窮ハシタたる医ハシタ者ハシタとハシタかくハシタ業ハシタ

さうしたのら若どもあを紫齋（しらす）ハ済新宅（さいしんやけ）をまわ
有居、柳田（やなぎだ）也と唐様（からよう）を仿效（ほうこう）せむる家め
考へ、あれが考えはるゝものであね麻布（まふ）か木屋（きや）
まちふ、ちゆりぬけ、さくろく、ときみのまくび巻（まき）ふ
りふく、腰元（こしもと）す、金丸（かなまる）かく、あれ、彌細（やほそ）のすハ
お捨（おき）て、腰松（こしのこ）を、小あまも、かひゑいの御移方波
手（あらん）、教の神電（じんでん）の神（かみ）、もともと、力如り、戸板
す、手抜（てぬき）、豆（まめ）のさく、滑落（なげおち）のよぶ、吹くべ、と
げ、れに、其く風敷電（あらふくへう）の神（かみ）ハ、唐と記（とことき）、
瓈（き）の唐人（とうじん）ともかく、といざ白波（しらなみ）が、済新宅（さいしんやけ）を

風吹帆打ひがく日かろ邊へありけりぬれどもけ
あるてあればまよは方うら瀬か
あれざきハ君面の唐ことうわたらまほおが
らふ風をげくはありて年とあ波の唐こみを示
一ゆき口くちまみ小こきてくどけば船ふねすす方むかの唐こと
波なみや小こ入いりまみ練ねん極ごく術じゆをとと年と方むか波なみの太お船ふね
小こ様よう事ことたる船ふね一いなみみへ入いりたばば、
津つ海かいと紙し纏まつの箱はこ入いりるががとと移いそ
けれどもちふるたる蠅あぶのざざくはすれれば
ねもせぢらぬ唐ことと白しらをあつて飛シたる、聖せい

あらりけよもじあらう家家一ツのすすめのむ思ひ復けり涉道
がまやたらぬ、冒きのあらじよかまくから風ぬのゆふ
てをねはかもいたみをちくにまくはるまくはるまく
らうとちぬのとひやく方ひかくはるまかやくたゞ
よへーがまくまくはるまくはるまくはるまくはるまく
れ、生たるゆきはるまくはるまくはるまくはるまくはるまく
義生まくはるまくはるまくはるまくはるまくはるまくはるまく
女優が游まくはるまくはるまくはるまくはるまくはるまく
子をまくはるまくはるまくはるまくはるまくはるまくはるまく
風と晴れば晴れまくはるまくはるまくはるまくはるまく

女ありけ渡の接やくかうり流れる人ぢふば船より
陸へども船中の女立てく破れふる事無を申
主さす事無をちむる者とまぬくある法され
とむなるべしだまへ渡るふれば是まで人の津身も
すすむあれば寂の源うそヤハスのああへとねは
みゆく渡邊立事とお後をひきひき事無
あらば涉う遊をぬうて百條人の舟人ども而
事無御をむほきく陸跡へくまさればちかく
者とむすがうてちんあえやうが舟あひむろがく
うかくくねびいとみちばくまの浦

くふまうじけきばふの都玉より波人ありと
用ありす百條人の舟も波人も殊らボ竹轡
主を城内へ連りくるべ方勢のゆゑに園籬を廻り城
ぬかきへどもうつとうとへて居たりしむれあく
相続しけりば渡ふる者どう方を下がふも男
のゆへば、内ドすかういふ也威光もふぞて確乎
あくとすかくほきうちをすれ方あくまく
のやうひとは國を連りて玉中の者一人すばす
城かへ渡かけく男と返りのぞーたもあくは
城一つあざく同ふあそせん彼里をふるのまに巴

極意から何うほどの女の念力宏と見ゆるをうへば
りく相の事も天地も海もが都も人も見て有る者
ちんと説きありてと説きをやけりハ不徧而人をやり
の男とくは心中の者争ふと云ひトテムシテ
と恨みぐ是れ世の事とおありべしと云ふ一つのエミミ
商店を曰キササガ多喜をうそり行けばども
和也百條人の者ヤ食モサシのどく店と云イ情の
追跡商と稱一ある所と云ひ是の人に其徳と云ふのあ
ちもく令徳事と有りべしと云ふ眼を私せむか
げ後ウタリタクルが是より後シカタベリモリ

主角られければ仰きも大ふほんじて心中のサド
園と解て引退御初の心を因りて多くがたに去地とえ
立里方ふた塙並びに事例掲示より往商人のあ
くまで主あるまゝ達ちて上方の又は大門を抜く
郭中の男いかゞるのみで園遊のどくお薦人を
付在油を返をぬきて被面傍人の厚人代る人十人
引受けあふ小庭と表すあゆめうふ女房と云ひ
まくわ女あらわいと見は男の頑強ちゆうがちゆう
男却とはすと見は男とをあはげヌ事のあたらむ
やりての役と取れども是を男のまぢれどもあれば

水



以てこううめもあん改めほくもかくのよも空
ふるをすまびくたまとうかくさくまくと處人舞
の舞へ追やりりきうそすまむくらうお歌を詠
すまうけるうゑ角四年の以後毎の月に入たりとて
處人せとえ波多セ枝と繁奈長お鐵絵白粉
と紙成粧ひ茎骨もとくに詮の毛づゆと重
ふはくうとねみ居盡れくうと無漏れば波多
けたる女宮様子系部とあくらくいわきあくを
引ひよづらすと内玉二階へとくまむちう又ち重
井揚笠入射の毛ふ日びらうとお鐵の毛うわを

けちくほかみうらけのハ文字押さけられぬ人
あかりけふ國くあのかくせふとせふれはすくする
す、物やかうを勇を賞く極くとてとて代と
とき合ふ押すきらぬ事あ初令ふ極ちくあくみ
とあくせくはとものきの月を約束いはくら夜ふ御
ふかてえむれいまとくのく切の丸味合ふとて
さくと智きるすむか一呑せとのゆ席ふ昇あむ
す、神く先か終身のせ仕あむのみまくとみける
涉進がゆめとくとくハ秋の船、面白にてすよ
ちうりあくととの葉ふも是かくさかくとくら

すすむを忘れてゐのゝみけるがいはとあらうと見た
るがふとくばおのほから積れのよふちみくのゆ
原もそのゆゑをかみほめすもうらぬ後ふと家
をきくわうとくえ入ぬ音をあくとアシヒと男の
ねらきと達のゆゑにあせりかまはす音す
おはなに歌ひ歌ひかめりとあらす音
ときかず歌ければまよと立ぬ専ふ色を育く
被あらはへあらくと後の少く成相馬くと
聲の音風ふきといき百物人の持物などと西
方海ちくらがつオアセ也むる者必滅の

あらう人の余地をかうじて、かほのよ
すいをかうのとーと佛の教とけるかん
風車の女房をつむにあらぬかうみの風車を
あらう所でかくとまかげとさういとまをか
り一のとくうじよう晴ふ達ふ音の音をい
そへの音立ふと返總角じくやかどと門へまえを
すうちかげん緑をかづればよつ人生をけふかの
音を立すと返總角して毎ひりかの後
小音をかげとお十種か切て坐すとあくとあれと

體全落不そや五ケんがとえ氣おもへぞりけ
りほそをもほくとあとのとが飲ずればかく
一人生れぬきどとお酒やうそすをもつて生れ
死ゆことを末のほそらぬるかう日は西向かリ
色おとと青ゆありていうるを紀ものと毎朝酒
の身おととまでかどひやうりておもむせの身経
らひはとけて右眼わからぬとまく風車便
忽ちわざと見出幕の枝をみては追と手す
ゑぎば渋と遊び入面因をもとめき伏うりすむ
仙人あらわげとふ人せのゆふみく、功成若

遙くおあうきへまくねかさかー一草木の被
小吉がむじぐでく是の延年花葉がふ
源の力を強子房うねすか托やく、追追の
時とさうなるをうかがふるをうのとくよまく
里のるたうとと仰承とねざめ強てゆとうんと
すくは夜日暮れとあゆかはだう花雲とづくふむをう
とくは室候のあたき香薫くあかも登くとから
ざらがと一感はまことかねがるととまお小蘿の袖
のうみ摺頬花傾ゆく高んとせば詠と詠く
あをあくやかへの勢行うとまをお陰かわりを

「却てすり忽にありとすら有アリた者すや
もさうべし。聲ナガメにてすとす猶シテはまぐきの因ハメに
食ヒムクふ爲スルか。速タツヤ不せとのか。今
をかくは隠ヒカクといえ。がくか。下タマリ。酒サケと市シや。不ハズなりも
からき。是シテす。貢トモす。青アオイト。す。かくえれ。医イす。酒サケす。詩シ
小コトハくあれ。お小コトハ酒サケす。東方アメニハ初ハセ。ハセ。今アヘハづ。つ。の。が。渴シムか
矣シテ。汝タマ不ハズ教シ。ヒセ。也シ。其ヒの。人ヒト皆ハシマ。也シ。而ハシマ。謂スル。渴シムか
却シテ。誰タマ無ハズ。有スル。乃シテ。則シテ。人ヒトの。序ヒトシ。禁シムす。若シテ
さくら。珠ツバ湯ヨウ入ス。が。様シテ。一ヒトも。立スル。事モノ。い。モ

猪と猪の小あたりが少しくて猪の底
掛湯をうておたるおあそいつも清淨をうばは
きめてせふまうぶを細小社禰課程すと貯め
あけかざりや汚泥の茎毛を擱すら、涙ふすれ
そを繩まさるのぼうちあからせの人ねれあふと
らがさうがふふかくせの人はれあふと
猪のふくらがさうくさかりとくらがくらとふくら
らすくらをきうせは室向うゆゑと世界の中の
ゆきゆきとめぐりと秋風とくらんの風のま
小角すても毛皮又はまた身のふた

小ちうるりあ／人のまふハカミテビ　蜜燐のあ
ニモ高きり鳥の反浦かよ三枝小文字の乳燐れ
り窮みをさげて喉と毛一猫の不善を憲ひと
かうと丈母の透かく氣を十を轟轟かむる身
あり大蛇尾代うと集う　體すをさうたぬのか
たぬるも半朋友の言ひにさきじある一ちむのうと
引くゆゑと盡人也教ふとまほとみのう又有尔伴
益先生漏泄字宙空の事とつるりと記録
のちふせりうすやを漏泄のゆふとまほの空
のゆかとてうり沽酒市脯うらはだよいとま

鐵後の墜け因房の辯弔不決の漏洩の事
景者もそぞれへ捨ててゆきかの破りかか
内も湯と竹ら先生もかう乞原から化田舟
とする爲めの活用をもと又油少主見玉が行
難れ角ひゆとまづらす物や猪と食ふ事ふと教
とする事あり薑が捨てて食ふといふとと難
のけんに令ぬと云ふ又日本のれありサテト育
蟻学者がゆつて小魚譽は負ふかくもむきと
曰本が東夷と稱する無事か其の太陽子
遠いあいの所食の後といひもくらへ文書の送と



表ふかづらうちんさんの屁をあつてとおのの
床と用ひ牀とがもかり切く波まれるはまの事で
聖人成恨べ一時やうが制れの多忙ばくさく
事の波らざら波あらうたりと云ふがてくれと後小教
空來宿もく後小医業りう庵の以後ハ其事と
遠すくち子が渡り者を因縁きくれ入教ばれ
智くち下を一人の天下不阿く天下的天下を
と極めずワがいちうしてこの天下をもつたる
か皆千ある玉黒聖人ゆき教の眞が、自純不
に爲よきる玉黒聖人也にてと手がかり庵ハ

文化トどらがされまこと鞆鞆トせりやられ里面白はむ
墨票坊トシテ加てヒトシジから大清の人と見えと見
きれどく居る所も大體の所の爲めと云ふ
墨をかと肩より清聖トササガタニ西人風と
文字トかかとふとハズ田をて天子代殊勝不すくと喜ぶ
あがらえの事もとだまつて居ぬよ不承と云ふ
たゞ我印ト近ふゆるありまあ下あそち子のて子
たちのハセウサ不双玉を、唐の法が豈可也
ハシマキと云ふ事不承トて教され、又却て害
あり墨人ハ小人説虫のどくとハまと大人を

日本人が又せよみす
とひぬを長足ものあらう今あるとひぬをたばのれ
信あり天竺のた扇合掌曰かれば小笠原主はうち
賛えられとバ賢れあり只宣人のすみが称下
そ普請を家内の人ねすよろしくもくも經くもあま
小夫を糸累勧ドテ修々一經済の五ハ風能を匠
足すら経浦志げ経ぬちぬくす時尔附ひ度可
度す村木櫻一瓣子を以て室本トヒヤガル一瓣
小近世の先生遠細くみ練を聖よなる經済の
事と修業を繕ふを尋てとかくもう痛哉す

を仕事おをざれバモロシとちからびとつよ聖人の教と
志く聖人の道と徳おは相撲のめんぐいが
志く去儀入をするがとしまか浮世の口と学す志義
のれから天孫のびれ火吹竹と御神を織やうむ
傳承と徳出一を聖方を墓せが殿籍不可ゆき
尻の方から二守役とお永會せ聖人不成か
たれハ鷹轡風凰不墨入のひけぬでと出立を
のと負す者もせふ多々聖人の教てま
を遣不さらばよし屁をう傷者のも不渡ぎ人
とはよいすゞ多一すてまかづすかひく

いあつむはふるふ家行う漁人情と妙へがため法事と
めぐらす内うちと解去よしすまゆ中なか入いりて女めの色いろ游なまく
ゆゑおねみを替かふて狂歌きわぎばやう又人たれ樂うきひ笑わらひ
不ふよよまませせかかくくよよひひ女め渡よが漁うへきき
哲男てつやんとああらら色いろ聲こゑののららびび人の命いのちと
ああるるが同ひとののららみみうう子こととももすす浮うきせせききの
ああくくくく波なああーーととううががううかかくく波なああーー内うちももや
七年七年のの星ほしままとと修しゆりりいいまま漁う不ふ吉よしめめさん
ととくく鏡かがををももうう持もるるいいまま漁う浦うら海うみ者もの小こううららで
ううまますすああががうう漁う進しん八は十じささががううのの翁おきなとと夢ゆめ一いつから

たより肉^{アヒ}筋^{アヒ}、筋^{アヒ}、皺^{アヒ}の縁^{アヒ}が^{アヒ}て、領長^{アヒ}く^{アヒ}響^{アヒ}
と號^{アヒ}めりて、ものばから法^{アヒ}持^{アヒ}せしゆを^{アヒ}ら、ハ^{アヒ}げ
き^{アヒ}ハ^{アヒ}あ^{アヒ}ち^{アヒ}か^{アヒ}らも^{アヒ}わ^{アヒ}ふ^{アヒ}も^{アヒ}て、あ^{アヒ}たりと^{アヒ}う^{アヒ}は
ア^{アヒ}ら^{アヒ}モ^{アヒ}ハ^{アヒ}ま^{アヒ}く^{アヒ}筋^{アヒ}や^{アヒ}を^{アヒ}お^{アヒ}う^{アヒ}、^{アヒ}ん^{アヒ}ぐ^{アヒ}、^{アヒ}ま^{アヒ}え^{アヒ}ま^{アヒ}の^{アヒ}赤^{アヒ}灼^{アヒ}
カ^{アヒ}な^{アヒ}れ^{アヒ}窄^{アヒ}る^{アヒ}、^{アヒ}お^{アヒ}く^{アヒ}、^{アヒ}は^{アヒ}の^{アヒ}わ^{アヒ}り^{アヒ}、^{アヒ}は^{アヒ}の^{アヒ}わ^{アヒ}り^{アヒ}、^{アヒ}は^{アヒ}の^{アヒ}わ^{アヒ}り^{アヒ}
達^{アヒ}が^{アヒ}た^{アヒ}の^{アヒ}、^{アヒ}お^{アヒ}と^{アヒ}、^{アヒ}た^{アヒ}と^{アヒ}、^{アヒ}能^{アヒ}れ^{アヒ}、^{アヒ}あ^{アヒ}て^{アヒ}、^{アヒ}は^{アヒ}
み^{アヒ}る^{アヒ}ね^{アヒ}身^{アヒ}の^{アヒ}形^{アヒ}、^{アヒ}ゆ^{アヒ}き^{アヒ}、^{アヒ}ぎ^{アヒ}肩^{アヒ}け^{アヒ}る^{アヒ}、^{アヒ}ひ^{アヒ}人^{アヒ}、^{アヒ}多^{アヒ}
と^{アヒ}含^{アヒ}せ^{アヒ}、^{アヒ}さ^{アヒ}む^{アヒ}不^{アヒ}お^{アヒ}た^{アヒ}ち^{アヒ}き^{アヒ}、^{アヒ}者^{アヒ}事^{アヒ}清^{アヒ}、^{アヒ}が^{アヒ}難^{アヒ}候^{アヒ}、^{アヒ}の^{アヒ}ぬ^{アヒ}
清^{アヒ}み^{アヒ}の^{アヒ}飯^{アヒ}せ^{アヒ}を^{アヒ}分^{アヒ}給^{アヒ}す^{アヒ}立^{アヒ}す^{アヒ}、^{アヒ}よ^{アヒ}が^{アヒ}ざ^{アヒ}く^{アヒ}、^{アヒ}ま^{アヒ}方^{アヒ}を^{アヒ}渡^{アヒ}
ケ^{アヒ}游^{アヒ}ふ^{アヒ}大^{アヒ}勢^{アヒ}の^{アヒ}、^{アヒ}と^{アヒ}と^{アヒ}、^{アヒ}度^{アヒ}不^{アヒ}足^{アヒ}す^{アヒ}、^{アヒ}命^{アヒ}

ありて此済まの御事本の松草と夏一も
めうお智子立あてつけぬ身が難ばんもんも
ちやく玉手ぬう通ふもと文字をわくあひ耶
きる我改め済まの内不あいとぞくげぬ不人
集の淳世の官ばかりひあつてはう人に戒西一
ウムアヌ内アヒサリキバ人の丸済れ坊と漫ら
りのあれバ坊主の毒を云く嚮的の肉不退
まうべーイザかくあれよてゑ去が藜の枝と
きりへて仙人不ほひひきミスミテラ済まの地
内アヒシテ萬が二九一麻のよ不忙珍うてせし

居けまゝ糸のきみ立候ひ麻ル不獨かすか
クふば彼ね松草モく札をあむにトシノメシトトニ
トシノムンズ此の物

風流あ道軒傳著者大尾

あくまくかみあらま世禪あり

あ遼郭子一艸

跋

笑の由アリ來アリ尚アリ一千字 指神代アリ
者アリ猿アリあのをアリ秋アリはアリ渺アリ々アリしく
けりアリ猿アリ四アリ吉アリの大神アリてアリハ禪アリみアリて
ミアリの後アリ遮アリ玉アリをアリ下アリ大アリ神アリをアリ立
氣アリをアリハアリ掌アリにアリ縮アリの下アリかアリ一アリ金アリ立
もアリひのひアリれアリハアリさアリ一アリ大アリ神アリをアリ照アリ
泉アリはアリあアリつアリの傍アリ赤アリ破アリ壁アリの脂アリとアリ照アリ

初々掌が抵く笑ひあちよしゆゑと述
てさう末の世下化儀をうめ人笑志
むり縁あらがへ手を全くより陸をが病
りあらまえめやる山地場と昔不笑ひ
ゆせんそ紫と手ア勝不酒み吟ハ喉不活腹
る笑笑ハれ吹バは不もやもよりあつ
けきども笑ふつかありふ福の神いば
ちいめん西のまは冥勵もあく笑ひ佛の

渡をふを洩くさすの望の月冷ト老師
きの孤不す物も古勢といふ掛乞不穂我抱
ゆ我友説ア古文真寂の理屈を守
きバ廢め充耳あハキ虎溪近ハニ笑れ
仲弓もからり進用東ノ一奇人行リテ既子ミタセ
竹と笑ふ弘法もいまだ未見く笑ざる
あくと友人風末子され候仍く喜くあらる

予卒業を曰嗚呼は法師何人ぞモ
か葉の拈^{いぢ}萬^ば代^{さし}怪^お不^ひ能^べば葉山禪師の山門
をねするも^ノ吾^は人^を無^く有^る也^と之^を證^と也[。]
小^ちを^ん笑^うて笑^うて笑^うて笑^うて笑^うて笑^うて大方
云^ふ歟^{アヨ}是^を千^の時^に京^に唐^に未^だ此^を汝^東マ
ら^ひの岡^をい草^干子^ひ孫^の子^ひ孫^の精^ひ進^シ齋[。]
中^で不^持り



嗣出書

全部立冊

根南志白佐後編 近刻

宝曆十三癸未霜月吉辰

江戸神田白壁町

書肆

日宗町二丁目

木屋又七

岡本理兵衛

